

氏名	佐藤 大介	
授与した学位	博士	
専攻分野の名称	文学	
学位授与番号	博甲第 5997 号	
学位授与の日付	平成 31 年 3 月 25 日	
学位授与の要件	社会文化科学研究科 社会文化学専攻 (学位規則 4 条第 1 項該当)	
学位論文題目	どうやってものごとは現実的なものとして認められるのか ——フッサール現象学における現実性と反省の問題——	
学位論文審査委員	教授 竹島 あゆみ 准教授 植村 玄輝	教授 谷 徹 准教授 岡本 源太

学位論文内容の要旨

本論文は相互に関連するふたつの目的を持つ。第一の目的は、「ものごとを現実的であるとみなす際にわれわれはどのような仕方に基づくべきなのか」という問題（筆者の佐藤氏はこれを「現実性問題」と呼ぶ）に現象学の創始者エドムント・フッサールがどのような解答を与えたのかを再構成することである。そして第二の目的は、こうして再構成された見解を、「まさに働いている意識は反省によって捉えることができないのではないか」という方法論上の疑念（佐藤氏はこれを「反省の問題」と呼ぶ）から擁護することにある。本論文は全 4 章からなり、第 1-2 章が第一の目的に、第 3-4 章が第二の目的にそれぞれ取り組んでいる。以下では、各章の概要を示す。

第 1 章「現出による動機づけ」では、現実性問題に対するフッサールの回答が、この問題にもっとも集中的に取り組んだ中期の主著『イデー I』（1913 年）に主に依拠して再構成される。議論の出発点となるのは、定立（私たちが何かを成り立っているとみなす働き）のうち、もっとも正当なものが、「直接的に『見ること』（das unmittelbare „Sehen“）」に基づくものであるという見解である。こうした定立を「現出に動機づけられた定立」として分析する『イデー I』の第 4 篇の議論はきわめて概略的なものであるが、佐藤氏はこれを、同書第 3 篇のノエマ論を参照しながら、一定の実質を備えた立場として再構成する。また、佐藤氏は、この立場を十全なものにするためには、時間意識に関する議論をそのなかに埋め込んで不足を補う必要があることを明らかにする。

第 2 章「〈今〉における意味志向の充実」では、この埋め込みが実際に行われる。具体的には、『イデー I』における定立の正当化（「志向の充実」）の分析における不明瞭な点が、『内的時間意識の

現象学』講義（1904/05年。刊行は1928年）での把持・原印象・予持を用いた「幅のある〈今〉」の分析を用いることで明確化される。また、それにともなって、『イデーⅠ』の議論では時間意識の問題はさしあたり棚上げできるというフッサール自身の公式見解が、誤った自己理解に基づくものであることが論じられる。これらの議論を踏まえ、佐藤氏は、ここまでで再構成したフッサールの立場に対して、反省の問題が躓きの石となりうるということを指摘する。

第3章「反省の問題に関する先行研究の整理と比較検討」では、フッサール現象学における反省の問題に関するこれまでの先行研究が、批判的な観点からサーヴェイされる。佐藤氏は、Klaus Held、斎藤慶典、新田義弘、Dan Zahavi、榊原哲也、Wenjing Cai、谷徹による先行研究を統一的な観点から整理し、それらが共通して、反省の問題の発生源を反省の持つ「後から」という性格に求めること、そして、反省の問題をフッサールが明示的に立てたものとみなしていないことを明らかにする。

第4章「反省の問題は本当に問題なのか」は、前章の成果を踏まえ、先行研究が指摘したような反省の問題はフッサール現象学にとってそもそも問題にならないということが論じられる。佐藤氏は、『イデーⅠ』および『内的時間意識の現象学』附論IXに依拠して、フッサールが知覚型の反省と想起型の反省という二種類の反省を区別していることを指摘したうえで、前者の反省は現に働いている意識を反省によって捉えることができるということを論じる。また、その成果を受けて、先行研究の共通の拠り所である「意識の非対象性」と「意識の対象化としての反省」というふたつの前提における「対象」の意味が異なることを指摘し、それらの前提から反省の問題を立ち上げることができないことを明らかにする。最後に佐藤氏は、知覚型の反省がフッサール現象学において持つ意義を、本質記述の素材提供と記述の正当化というふたつの文脈に即して挙げる。

結論部では、ここまでの議論の成果の簡単な確認に続き、本論文が残した今後の課題が二点指摘される。第一に、本論文での再構成によれば、「現出に動機づけられた定立」に関するフッサールの議論は現出をノエマの側に位置づけるものであり、こうした帰結が持つ含意が、ヒュレー（感覚）を意識の実的な構成要素とみなす『イデーⅠ』の公式見解を踏まえつつさらに論じられる必要がある。第二に、現に働いている意識を反省によって捉えることができるという本論文の成果を踏まえることで、フッサールの後期時間論を、意識の反省と自我の反省というふたつの観点を分けた上で解釈するという展望が開ける。佐藤氏は、これらふたつの課題を、超越論的観念論と自我論という、フッサール現象学の中心問題に対する新しいアプローチとして提示することで、本論文を閉じる。

学位論文審査結果の要旨

本論文は、各章でフッサール研究に対する新たな貢献を行うことに成功している。佐藤氏自身も本論文の中で指摘する通り、定立の正当化に関する『イデーⅠ』第4篇の議論は、これまでの先行研究において、細部まで立ち入って論じられることが少なかった。こうした事情に鑑みて、定立の正当化を現出による動機づけによって分析するフッサールのアイディアを具体的に再構成する第1-2章の議論には新規性がある。また反省の問題に関する先行研究の検討を行った第3章は、(Klaus Heldの強い影響下で)この問題をめぐるレベルの高い議論が蓄積されてきた日本での研究も含め、

重要な論考を統一的観点から整理しており、今後の同様の研究においてかならず参照されるべきサーヴェイとなっている。そして、知覚型の反省と想起型の反省の区別に着目して展開される第4章の議論は、後述のように課題を残しているのだが、反省の問題に対する新しい解釈と評価を、一定以上の文献上の裏付けを伴って提出することに成功している。ここで付言すべきは、これらの章のすべてが何らかのかたちで公表されており、専門家による吟味を経ているということだろう（ただし本論文では各章の内容が増補・改訂されている）。第1章は、日本現象学会の研究大会での発表（審査あり）を経て、同学会の査読付き雑誌『現象学年報』に投稿された（現在審査中）。第2章は、フッサール研究会での発表を経て、同研究会の雑誌『フッサール研究』に掲載予定である。第3章は、『岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要』に掲載された。そして第4章は、日本哲学会研究大会での発表（審査あり）を経て、同学会の査読付き雑誌『哲學』への掲載が決定している。

各審査員から指摘されたように、本論文にはいくつかの課題も抱えている。(1) 定立の正当化に関する本論文の議論では、フッサール研究という文脈を離れたときにそれがどのような位置づけを得るのが（関連する先行研究に言及するある注をのぞいて）論じられていないため、本論文の成果がより広範な認識論的な問題とどのような関係を持つのかは、必ずしも明らかではない。(2) フッサールの議論の再構成についても、「カントの意味での理念」という発想の内実と役割に関する論述が十分に展開されているとは言い難い。(3) 『イデー I』における時間論の棚上げに関する同論文の議論は、検討されてしかるべき別解釈——知覚型の反省に関する同書のフッサールの見解は、原印象と把持の関係についての詳細な議論を脇に置いた結果として出てきた不適切なものなのではないか——の可能性を十分に退けるものではない。(4) 本論文で佐藤氏は自我論に関する研究を今度の課題として挙げているが、世界の構成や言語の問題なども発展的な話題として扱われることが望ましい。(5) 同論文は「定立の正当化という事柄そのものが、その分析がいかんして反省によって捉えられるのかという考察のきっかけとなる」という構成を持ち、この構成それ自体が、事象そのものがそれに接近するための方法に関する考察を促すというフッサールの探求のあり方を体現しているにも関わらず、そのことが論文中で明示的に語られていないため、せっかくの特長が読み取りにくくなっている。

以上の課題はどれも重要ではあるが、(1) から (3) はどれも、本論文の主要な主張を切り崩すものではない。(4) は、本論文後に佐藤氏に期待される研究の方向性に関わるものであり、同論文の実り豊かさを示唆してもいる。(5) は、本論文の瑕疵を指摘するというよりも、著者自身がはっきりと気づいていない美点に関わるものである。そして佐藤氏は、5つの課題のそれぞれに対して、審査会の場で今後の研究の見通しを十分に示す応答を行った。以上の点に鑑みて、審査委員会は、本論文が博士の学位にふさわしいものであると判断した。